モノロオグ

岸田國士

青空文庫

花莫蓙を敷きつめた八畳の日本間、寝台、鏡戸棚、テーブル、椅子等、すべて安物の西洋家具。寝台には、掛蒲団がなく、マトラスだけになつてゐるところ、テーブルの上に椅子が一脚、逆さまに載せてあるところ、この部屋が、今誰にも使はれてゐないことを示してゐる。

装飾と云へば、壁に、新聞の新年附録らしい美人画が、鋲で留めてあるきりで、そのほか、何か「歴史的な」ものを求めれば、柱の一本に、四月十七日の日附が出たカレンダアがぶらさがつてゐる。

正面は障子。左手は、一間の床の間と一間の押入。

曇つた日の午後四時過ぎ。

廊下で、ばたばたと跫音がする。

障子があく。女が現はれる。

派手なセル。流行遅れのショール。汚れた足袋。

部屋ぢうをひと通り見廻した後、彼女は呟く。

――ほんとだ。……やつぱし、ほんとだわ……。

部屋の中を、あつちこつち歩きまはる。寝台に腰をおろす。

――何処かへ越したんなら、この道具だつて持つてく筈だわ……。だつて、これみんな、要るものばかりぢやないの、お神さんが、いくらで買ひ取つたか知らないけど、あたしに云へば、掛合ひ方だつてあるわ……。

急に起ち上り

――だけど、随分ひどい人ね、あたしに黙つて、帰つちまふなんて……。いくらなんでも、そんなことつてないわ……。

椅子にもたれかゝり、涙ぐむ。

――それや、一月つていふのは、少し長すぎたけど、どうしても手の放されない患者だつたん

ですもの……。一晩、代りを頼んでと思つたこともあるわ。でも、やつぱり、気がとがめて……。あゝいふ時、手紙のやりとりが出来ないつていふのは、一番辛いのね。会つてゐれば、話が通じないぐらゐ、なんでもないわ。西洋の男つて、みんなあゝかしら……。こつちの思つてることを、すぐ察してくれるし、口を利かずにゐて、ちつともきまりがわるくない……。向うは向うで、独言みたいなことを云つてるんだけど、あたしは、そんなこと別に気に留めずに、可笑しければ、勝手に笑つたり、どうせわからないと思ふから、時々は、「馬鹿」だの「間抜け」だのつて、からかつてやつたわ。さうすると、しまひに、その意味がわかつたらしいの。「ワタシ、バカデス」つて云ひながら——あゝ、よさう……あんなにいぢめられたことないわ……。

突然、寝台の上に突つ伏し、涙声で

——なぜ、そんなに急に行つちまつたの。あたし、今日も、うんとうんと、いぢめて欲しかつたのよ……。

からだを起し、腰をかけたまゝ

——変なもんね。あたしたち、あれから幾度会つたかしら……。去年の三月からだわ。一週に一度、十日に一度、長い時で二十日も会はずにゐたかしら……。病院の附添を、一つ済ますたんびに、きつと来ることにしてたんだけれど、あの人は、何時でも、愛想よく、あたしの肩に手をかけて、「ヨクキマシタ」つて云ふの。それだけで、あたしは、もう、うれしかつたんだわ。

起ち上り、鏡戸棚の前に行つて、自分の姿に見入りながら

——はじめつから、こんなことになるなんて知つてたら……。さうだわ、あん時のことを考へると、まつたく不思議なくらゐだわ。先生からぢかに、「君、今度の附添は、少し勝手が違ふかも知れないが、特別に気をつけてくれ」つて、さう云はれて、あたし、なんだらうと思つたの。さうしたら、あの人だつたんだわ。病室へはひると、いきなりそばにゐた男が、「あなた、英語はできますか」つて訊くぢやないの、誰かが、好い加減なことを云つたのよ、きつと……。あたし、黙つて、笑つててやつたわ。病院でも、西洋人の入院患者は初めてだつていふし、あたしも、西洋人なんかに附くのは初めてなんですもの……。なるほど、勝手が違ふのなんのつて、いちいち先生のところへ訊きに行つちや、叱られたもんだわ。

椅子を引き寄せ、脚をがたがたさせながら

――その晩、体温を計ると、四十度二分……。苦しさうに呼吸をしてるの。あたしがそばへ行くと、眼をあけて、何か云ひたさうにするんだわ。よく見ると、そんなに怖い顔ぢやないんだけど、なんて云つたらいゝのかしら……やつぱり、気味が悪いんだわ。鼻なんかでも、鳥の嘴みたいで、赤い筋がいつぱい見えるし、眼は、黒眼んところが妙に銀色をしてるし、髪の毛は、そんなに縮れてないけど、それは、おほかた禿げてるからなの。

そこで、吹き出すやうに笑ふ。

――あゝ、そのことで、可笑しかつたわ。頭を見て、好い加減お爺さんだと思つたら、体温表に二十九歳つて書いたるぢやないの。間違ひかつて云へば、さうぢやないの。なるほど、さう思つてみると、若いやうなところもあるつて、婦長さんと大笑ひをしたわ。日本の風俗とかを調べに来た学者なんだつていふけれど、学者みたいなとこは、ちつともなかつたわ。それに、まだ日本へ来たてだつていふんだけど、誰に教はつたか、片言の日本語を時々使ふの。だから、なほ、悧巧には見えないわ。

急に、真面目な調子で

――気管支炎なの、病気は……。だから、毎日、湿布を取替へなけやならない。妙でね、はじめは……胸をひろげると、毛がもじやもじやでせう。そのくせ、皮膚の色は、それや真つ白で、艶々してゐて、女だつたらつて思うくらゐよ。妙なもんよ、それや……。

だんだん、しんみりと

――熱は、一週間ぐらゐで、ずつと引いてしまつたわ。食慾もつくし、元気も出て来たわ。牛乳を欲しがるつたら、ないの。でも、食べものは、なんでも珍しがつて食べるの。特別に洋食を取るなんてこともなかつたわ。危つかしい手つきで、お箸を持つてみたりするの。あたしが教へたのよ。見てると、面白いより、気の毒になるの。遠い、違つた国へ来て、かうして病気なんかになつて……そんなことを思ひながら、そばでお給仕をしてると、つい、親身に世話をしてやりたくなるわ。

何時の間にか、椅子にかけてゐる。

――それに……さうだわ……。丁度、あの頃は、あたしにも、云ふに云はれない苦労があつたんだわ……。三年も一緒に暮した男と、あんないきさつから、別れたばかりだつたし、これから、一人で食べて行くんだつていふ気持の張りから、仕事にもうんと熱を入れ出した時分だわ……。夜中にでも、ちよつと咳が聞えると、どんなに眠くつても、すぐに飛び起きて、シロップを一匙飲ませる……。あの人は、「アリガタウ」つて、そのたんびに、お礼を云ふの。そんな患者つて、滅多にないわ。それが、その云ひ方よ。言葉だけでは足りないつて思ふのか、顔つきで、それや上手に、さういふ心持をみせるの。だんだん馴れて来たせゐもあるんだけど、そん時の眼なんか、あたしたち女にさへ真似のできないやうな、優しいつていふのか、情の籠つたつていふのか、まあ、そんな眼だわね。それと、あの溜息……さうだわ、さもうれしいつていふ溜息のつき方、それなのよ。西洋人つて、あゝいふこと、ちやんと知つてるんだわ。

起ち上り、今度は、また寝台の上に腰をおろす。

――もう、二三日したら、退院できるつていふ日の朝だわ。あの人は、まだ眠つてるんだとばかり思つて、そつと掛蒲団の下へ手をやつたの。脈を見ようとしてよ。あの人は、両手を胸の上に組んでたわ。この左の手首を、そのまゝの位置で、あたしは、時計の針を見ながら、

脈を数へてゐたの。七十四……。そこで、手を引かうとすると、あの人の右手が、いきなり、あたしの手をぎゆつと握つて、どうしても放さうとしないぢやないの。なんの意味か、ちよつとわからなかつたわ。いゝえ、とぼけてるわけぢやないの。実際、相手が男だつていふことを忘れてたのよ。笑はれても仕方がないわ……。でも、そん時、あの人の眼を見なかつたら、あたしは、まだ、戯談ぐらゐに思つたでせう。そら、やつぱり、あの眼なのよ。あたしは、ハツとして、力委せに、手を振り放したの。さうして、部屋を逃げ出したわ。

つと、また起ち上つて、鏡戸棚の前に行く。からだは正面を向いたまゝ、顔だけ鏡の方へ近寄せ

——その晩も、また、おんなじやうなことがあつたの。あたしも、今度は、平気で、笑つててやつたわ。ところが、その翌朝、どうしたつていふんでせう、あたしは、たうとう、あの人の手を握り返してしまつたの……。半分、悪戯のつもりで……。

さう云ひながら、髪に手をやり、ほつれを直す。で、今度は、正面を向いて、笑ひを含みながら

――そこで、いよいよ退院つていふことになつたんだわ。今夜一晩きりで、もう、この人は、何処かへ行つてしまふんだ……。さう思つてみると、なんだか、このまゝ別れるのが……辛いつていふと変だけど、まあ、名残惜しいやうな気がしたのね。向うは、無論、それ以上だわ……。

急に、その辺を歩き出しながら

――えゝツ、かまふもんか……。誰にも知れつこはないんだ。

やがて、ぐつたりと、寝台の上に寝ころがり

――あゝ、あの晩のことは、夢のやうだわ。翌朝は、綺麗さつぱり忘れちまふつもりでゐたことが、あの人のゐなくなつた後で、却つて、あたしを苦しめる種になつたんだわ。

急に、頭をもち上げ

――十日とは待てないで、八日目だかに、あの人の泊つてゐる神田のホテルへ、のこのこと出

かけて行つたもんよ……。どんな顔をされるかつてことも考へずに……。でも、よかつたわ……。あの人は、にこにこ笑ひながら、「ヨクキマシタ」つて、背骨が折れるくらゐ抱き締めてくれたの……。

起ち上り、歩き出す。

――それから間もなくだわ、あの人が、こゝへ引越して来たのは……。ホテルは不経済だからつていふんで、わざわざ、こんな素人下宿を借りたんだと思ふわ。あれで、なかなかガッチリ屋なのよ。この道具類を買ふんだつて、あたしを一緒に連れてつたのは、安い品物を買ふ手なんだわ。この寝台が三十八円、戸棚が十九円、椅子テーブルで二十二円だつたかな……。西洋人で、あんなの珍しいわ、きつと……。あたしは、もちろん、お金目当(めあて)にあの人とこんな関係になつたんぢやないからいゝけど、人から、たんまりお小遣でも貰つてると思はれるのが癪なくらゐだわ。さう云へば、附添料の外に二円の心附を受け取つたきり、最後まで、電車賃ひとつ出させたことないんだから……。その点は、大威張りだわ。あゝ、品物……？

それは別だわ。去年の夏、京都へ行つたお土産(みやげ)だつて、人形をひとつくれたつけ……。それから、この正月、どつかの店で、メリンスの端ぎれを六尺ばかり買つて来て、勿体らしく差出されたのには、少し間誤(まご)ついたわ。さうさう、御馳走では、竹葉の鰻を食べにはひつた

ことが一度、あとは、この家で、おそばか丼を取るのがせいぜいだつたわ。だけど、そんなことは、どうだつていゝの。どうせ会ふ日は決められないんだし、不意に来て、一日か二日、そばにゐられるつていふだけで、あたしは満足だつたんだから……。今から考へると、よく、あんな風で、これまで続いたと思ふわ。お互に、名前のほかはなんにも織らず、先々のことも、てんで問題にしないで、たゞ、会ひさへすれば、あんなに……あんなに、愛し合へるなんて、誰も想像できないにちがひないわ……。

鏡戸棚を開けてみる。

——おや、まだ掃除もしてないらしいわ……。

ボール箱を引き出す。

——ある、ある、いろんなものが……。

中から、オー・ド・コローニュの空瓶をつまみ出し、それを嗅いでみる。

――あゝ、この香ひ……。

今度は、歯ブラシの古いの。

――こんなになるまで使つたんだわ……。

それを、ハンド・バッグにしまひ、次に、釦一つ。

――何の釦だらう……。あゝ、あの外套だわ、きつと……。

これも、ハンド・バッグへ。そして、次に、折れたペン軸。

――あの人の手紙でも読めるなら、これもいゝ記念だけど……。

さう云ひながら、ハンド・バッグへ入れかけて、ふと、それを思ひ止(とま)る。それから、ボロボロのスリッパ、安全剃刀の刃、煙草の銀紙等を、ひとつひとつ、つまみ上げ

——どれもこれも、捨てていゝやうなものばかりだわ……。

ボール箱の中へ、再びそれらを入れて、戸棚にしまふ。そして、今度は、汚点(しみ)だらけの藁稈帽を取り出し

——まあ、この色……。

それを、ちよつと、頭にのせて、鏡を見る。

——あの人が帽子を被(かぶ)ると、それや、若くなるのよ。

急に、椅子にからだを投げかけ、肘で顔を蔽ひ、泣きながら

——あんまりだわ、あんまりだわ……。そんな……そんな法つてないわ……。なんとか、前に云つてくれたつていゝ筈だわ。それならそれで、ちやんと、覚悟するのに……。いくらだつて、諦めやうがあるわ。これぢや、どうしたつて、諦められないぢやないの。この次ぎ来れば、また会へるやうな気がするんですもの……。なんべんも、会へるまで来てよ、あたし…

…。

顔をあげ、あたりを見廻す。

――だけど、あたしたちは、どんな約束をしたんだらう。お互ひに、どれだけ気持がわかつてたんだらう……。あの人の、云つたりしたりしたことで、あたしの心に、深く残つてゐることと云へば、いつたい、なにがあるだらう……。あゝして、時々会つてゐながら、今日は前よりも別れにくいなんてことがあつたかしら……。またこの次ぎは何時になるか、あの人はそれを訊きもせず、あたしは、それを訊かれたくなかつた……。別れるたんびに、また会へるかどうかわからないつていふことが、あたしには、却つて気楽だつたし、そのために、随分大胆にもなれたんだわ……。

起ち上り

――さうだとすれば、かういふ日が、もつと早く来てゐてもしかたがないんだのに、どうして、今更……今更こんなに……こんなにぢたばたするんだらう。

壁に貼りつけた大美人画の前に立ち

——あの人は、この絵があたしに似てるつて云つたわ……。この絵と、あたしを見較べて、「コレアナタデス」とかなんとか云つたわ。さう見えるのかしら……。それや、日本の男がさう云ふんなら、あたし、いくらなんでも、信用しやしないわ。そんな、見えすいたお世辞、馬鹿馬鹿しくつて、きつと腹が立つわ……。でも、それを、あの人が云ふと、まんざら、お世辞ばかりでもなささうだつて気がするの。自惚(うぬぼ)れなんか起すんぢやないわ。西洋人の眼には、そんな風に見えるのかも知れないし、そこがまた、面白いぢやないの。だからさ、今仮に、おかめの面を持つて来て見せれば、「や、この方があんたに似てる」なんて云ひ出すかも知れないわ。罪がないぢやないの。つまり、さういふところよ。

鏡の方に向ひ

——やつぱり、好きになつてたんだわ……。それや、心からつて云へないやうなところもあるにはあるけれど、浮気(うはき)なら浮気で、もつと相手がありさうなもんだわ。あたしのやうな女が、あと先の考へもなく、男にからだを許すつてことが、どうして出来たか、自分でも第一わからないし、人から見れば、譫のやうな話だわ。だつて、今までに、さういふ機会はいくらも

あつたくせに、あんなに立派に、切り抜けて来たんですもの……。あたしは、女でも、どつちかつて云へば、冷たい方の女よ。それは、前の男との関係でもわかるわ。あの三年間の、踏みつけにされた生活を、黙つて忍んで来たあたしですからね。おんなじ家へ、へんな娘つ子を引張り込まれて、朝晩、寝床のあげおろしまでさされた経験を、いくたりの女がもつてるでせう……。でも、あたしを、意気地なしだと思つたら間違ひよ。あの男を捨ててしまふ気なら、何時でも捨てられたんだわ。たゞ、さうなると、意地よ、ほんとに……。何時か男の眼が覚めるだらうつて思ふ一方、その女との根気くらべみたいな形にもなつたんだわ。で、たうとう、あたしが負けるには負けたけれど、三年間の辛抱は、褒めてもらつてもいゝわ……。

椅子に腰をおろす。そして、すぐにまた起ち上る。

――二十五の年、つまり去年まで、自由な身であて、男つていふものを、振り向いても見なかつたわ。憎らしいとか、怖いとかぢやないの。なんか、かう、すかすかした、興醒めな気持しか起らないのね。どういふんでせう、それが、かうなつたんだわ……。いゝえ、それも、ほかの、どんな男にでもつていふんぢやないわ。あの人だけよ。あの人だけによ……。会はずにゐれば、切ないし、会へば、わけなく、ぽうツとしてしまふの。

両手で頬をおさへ、甘えるやうに科(しな)を作る。

――あら、どつかで笑つてるわ。まさか、あたしのことぢやないだらうな。

寝台の上へどかりと腰をおろし、スプリングでからだを弾(はず)ませながら

――かうしてると、あの人が国へ帰つたなんて、どうしても思へないわ。どつか、そのへんに、戸棚の後ろかなんかに隠れてさうな気がするわ。だつて、さういふこともあつたのよ。そんな巫山戯方(ふざけかた)をする人だつたわ。何時(いつ)かも、あたしが、奥へ誂へ物を頼みに行つてる間に、こつそり寝台の下へ潜つて、しばらくあたしに気を揉ましたわ。だつて、それが三十分からよ。出て来るところを、あたし、いやつていふほど、スリッパでぶつてやつたわ。さう云へば、あたしが乱暴すんの、とてもよろこぶの。あんなの、変態かしら……。

両手で顔をおほひ

――なんでもいゝわ。もう一度、たつた一度でいゝから会ひたい……。もう、これつきり会へ

ないつていふ、ほんとの決心をしたところで、しみじみ会つてみたい……。今までは、どうしたつて、それほどの気持にはなれなかつたわ。はつきりさうとわからないうちは、まだまだ先があるやうな、うつかり構へてるところがあつたわ。それが口惜しいの、あたし……。

今度は、片手で頬杖をして

——あの人が若し、あたしをフランスへ連れてくつて云つたら、あたし、なんて返事をしたらう……？　それや、いやだなんて云はないわ。でも、これまで、一度もそんなこと考へてみなかつたわ。それや、あたしには、ちやんと、あの人つてものがわかつてたんだわ。どうせ、そんな真面目な気持ぢやないにきまつてるわ。殊に、はじめは、向うも気紛れ、こつちも気紛れだわ。たゞ、あたしを、玩具にしたつていふのと、少し違ふところがある。それだけ、あたしも、本気になれたんだわ。釣るとか、瞞すとか、そんな腹は、どつちにもない。恩も義理もない代り、秘密も見栄もない。お互ひに縛られず、お互ひに、飽きもしなかつたんだわ……。だから、あの人が、日本にゐさへすれば、いくらでも長く続いた筈よ、何時までも、どんなことがあつても……。

急に、からだを捻ぢ向け

——あツ……。あの人には、奥さんがあつたのかしら……。それも、訊かう訊かうと思つて、たうとう云ひ出すのを忘れちやつたわ……。ゐたつて、別にかまはないけど……。いや、たしかゐない筈だわ。西洋人つていふもんは、旅に出る時、奥さんの写真はきつと肌につけてるつて話だわ……。それに、指環は、はめてたかしら……？　何かはめてたやうだけど、エンゲーヂだかどうだか、気がつかなかつた……。会ふと、もう、そんなこと気にしてる暇はないんだもの……。さうさう、あたしの名前を書いてみせろつていふから、書いてやつたんだけど、あの字を覚えるつて云つてたわ。独りで書けるやうになつたかしら……？　藤岡八重子なんて、割にむづかしいわ。

起ち上り

——ラ……ウ……ル……リ……シュ……テン……メッ……ケル。これがまた、云ひにくい名つたら、ありやしないわ。面倒臭いから、ラウちやんつて呼んでたの。羅宇屋さんみたいで覚えいゝから……。「あたし、親子、ラウちやんは……？」すると、「ワタシ、ウドン」ついふにきまつてたわ。

柱にもたれ

――戯談は別として、ラウちやんは、ほんとに行つてしまつたのかなあ……。あの、お得意の鼻唄が、まだ耳に残つてるわ。

それを、調子や声まで真似て

――フン、フン、フン、フウン……フン、フン、フン、フウン……フウン、フン、フン、フン、フン、フウン……。

また、次第に、涙がこみあげて来る。

――あたしが、これほどに想つてるのに、あの人は、平気だつたのかしら……？　平気で発てたのかしら……。あたしのことなんか、てんで、思ひ出してもくれなかつたのかしら……？　そんな筈ないわ。かうして、発つた後へ、あたしが訪ねて来ることも、一度は考へてくれた筈だわ……。お神さんには、たゞの一と言も、あたしのことを云ひ置いて行かなかつたつていふんだけど、「来たら、よろしく」なんて云ふ方が、却つて空々しいかしら……。か

うなると、相手が日本人でないだけに、見当がつかないわ。兎に角、あつちには、かういふやり方もあるんだわ。

ふと、柱にかゝつてゐるカレンダアを見つけ、それをはづしてみる。

——四月十七日……あたしが、この前来たのが……四月六日の晩……。十七日までは、たしかにゐたんだわ……。さうだわ、十八日に発つたつて、お神さんから、今聞いたんだわ……。それで、今日が、五月九日……。さうか、あん時、来てても駄目なんだわ、あれが、先月の二十日だから……。もう、よさう、こんなこと考へるのは……。

カレンダアを一枚一枚引きちぎり

——人はなんと思つたつてかまはない……。あたしたちは、かういふ別れ方をしても、ちつとも不自然ぢやないんだわ。何時の間にか、一方が姿を消す……予めそんなことは云はないでゐて……どつちか一方が、それを先にするつていふだけだわ。あの人のところへ、あたしが来なくなればそれまで……あの人だつて、それくらゐのことはわかつてたんだわ。二人は、ちつとも変つてないんだわ。たゞ、時が経つたつていふだけなの……。

ちぎつたカレンダアの一枚一枚を、無意識に丸めながら

――なにひとつ、いやな思ひ出も残さず、こんなに綺麗に、一人の人間から離れて行けるつてことは、一生に一度だつてないことだわ。それに……それに……どうして、あたしは……あたしは、こんなに泣きたいんだらう……。

椅子の上に崩れかゝり、声をあげて泣く。やがて、涙を拭きながら

――あゝ、さつぱりした。これで、もう、いゝの……。何時(いつ)までかうしててもきりがないわ。どら、お神さんがのぞきに来ないうちに帰らう。もう何処かから口がかゝつて来てるかも知れない……

起ち上つて、もう一度、部屋の中を見廻す。

――あたしも、なにか、通ひの仕事をみつけて、この部屋を借りようかしら……。家具つきで、このまゝ貸すつもりなんだわ。せめて、さうでもできたら、またなにか……なにか待つ気に

なれさうだけれど……。

力なく椅子に倚り

――このまゝ、またあんなところへ帰るんだと思ふと……どうなるつていふ当てもなく、毎日検温器を振つててみてもはじまらないぢやないの。

長い沈黙。

――おや……なんだつて、こんなに、この部屋に未練があるんだらう……。あの人にだつて、いざ別れようと思へば、もつと思ひきりよく別れられるわ。さうよ、今、此処に、あの人がゐてくれさへすれや、あたしは、平気で出て行かれるんだわ。もう、これで会へないと思へば、なほ威勢よく出てつてやるわ……。それが、あの人のゐなくなつた、この空つぽの部屋から、どうしても動けない……足が云ふことをきかないの……。気持が急き立てても、からだが承知しないんだわ……。だるくつて、だるくつて、しようがない……。

静かに起ち上り、寝台の上に、うつ伏せになる。

——あゝ、苦しい……。

激しく、肩をゆすぶり

——さうぢやないのよ。会ひたくつてぢやないわよ……。もう、なにもかもおしまひでいゝのよ……。たゞ……。

急に、顔をあげ

——え？　たゞ、どうしたの……？

また、涙声になり

——たゞ……云ひたいことが、いつぱいあるのよ……あの人に、云ひたかつたことが、今になつて、はつきり、わかつて来たのよ……。どうせ、何を云つても言葉が通じないんだと思つて、今までは、諦めてたんだわ……。いゝえ、それより、云ひたいことを、考へてもみなか

つたんだわ……。つまり、云ひたいことがなかつたんだわ……。

だんだん空想の世界に引きずり込まれるやうに

——ねえ、わかつてくれる、あんた……？　聴いててくれる？　眼の前で、声が聞えれば、なにを云つてるんだかわからなくても、かうして、離れてゐて、あたしのことを、少しでも思ひ出してくれゝば、きつと……きつと、あたしの云ふことがわかる筈だわ……。先づ、第一に……あたし、あんたに心からお礼を云ふわ……。なんて云つても、あたしは、仕合せだつたんですもの。女としての、重荷を負はない幸福が、あんなに易々と得られたことは、あんたが、何処かほかの男と違つてゐたからだわ。でも、その代り、あたしを、少しばかり褒めて頂戴……。どういふとこか、云つてみませうか。あんたの邪魔にならなかつたところ……。

起ち上り、やゝ朗らかに

——あたしは、もう二度と、あんたのやうな男に出くはすことはないと思ふわ。それはそれでいゝの。たゞ、どんな男とでも、次の日の約束だけはしないつもりよ……。

ゆつくり歩き出しながら、ふと鏡の前に立つて、着物の皺を直す。それから、障子に手をかけ、やつとからだが通るだけ開けて、もう一度、後を振り返る。

――ラウちやん、さよなら……、また、何時(いつ)来るかわからないわよ。

青空文庫情報

底本：「岸田國士全集5」岩波書店
　　1991（平成3）年1月9日発行
底本の親本：「職業」改造社
　　1934（昭和9）年5月17日発行
初出：「文芸春秋　第十年第六号」
　　1932（昭和7）年6月1日発行
入力：kompass
校正：門田裕志
2008年3月19日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

モノロオグ

岸田國士

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/